

伝統と文明 相克の響き

モザンビーク・マコンデ族演奏公演

アフリカ南部のモザンビークに住むマコンデ族の演奏公演がこのほど、京都市左京区の京都大西部講堂であった。現地の有名若手ミュージシャンが初来日し、自作の歌を披露した。身の回りの出来事を題材にした歌詞には入れ墨や大家族といった今も残る伝統文化と古い習慣への愛着とともに、押し寄せる現代文明との相克で揺れ動く心情がにじんでいた。(榊山聡)



優美な舞を踊るマコンデ族の舞臺に「響き」も披露された

現地の貧困層を支援する団体「モザンビークのいのちをつなぐ会(日本事務局・北九州市)」が、日本で知名度の低いマコンデ族の文化を伝えるために全国40カ所の公演を企画した。京都では市内を中心に8月末～9月にかけて計5日行われた。

京大西部講堂では、モザンビークを代表する演奏家のナジャさん(28)がギターを片手に自作曲を歌った。同じく若手のオズバルトさん(26)がベースを担当。パーカッションとコーラスは日本人がゲスト出演した。披露された10曲のうち、多くは日常のささいなことを歌っている。抑えられない愛の気持ちや新年を迎えた喜びが軽快なリズムに乗せて歌われた。

「日本人は浮気をしますか?」。ナジャさんは会場に向かって聞き、笑いを誘った。そして歌い出

マコンデ族の呪術を切り口に、モザンビークや日本の文化について語るミニシンポジウムが演説後、会場で開かれた。

「モザンビークのいのちをつなぐ会」の榊本真代表は、現地に数年住んでいる経験に基づき疑問を提起した。「外資系で資本主義の波が押し寄せているが、一方で古くから受け継がれる嫁姑の文化を背景に、情い相手を呪う呪術と心の傷を癒やす種類の呪術が今なお深く信じられているのはなぜだろう」と述べた。

京都大人文科学研究所の石

科学で割り切り切れない信仰、日本にも

井原雅徳教授(文化人類学)は「善悪の二元論で捉えるのはどうか。憎しみを呪術に託すことで、その人が救われている部分もある」と指摘した。

呪術と聞くと、日本とは遠い十人文化のイメージを抱くかもしれない。しかし、同研究所の藤原史雄教授(農学)は昭和30年代ごろまで東北には無免許の医者がいて、地元の人々にとっても感謝されていたような例は、ある意味で呪術的だった。占いや、科学では割り切れない信仰は今も何らかの形で残っている」と語った。

家族、愛、喜び…揺れる心歌う



自作の曲を歌うナジャさん(右)とオズバルトさん(前列中央)＝京都市左京区・京都大西部講堂

うな曲も歌われた。「マシニテ」という歌は、子どものけんかをしかける癖があるマシニテという男をいさめる。「もしも放っておけば大人たちがやって来て、子どもを奪き込んだ大きなけんが始まる」と続く歌詞は人生訓められているが、先進諸国の覇権争いに翻弄されてきた大地の声に乗ると、小さな火種がやがて大きなさかひにつながるという警句は、ある重みを持って響いた。

哀愁な独身貴族を諭す歌も興味

月読神社で舞われたの

